

【 復活讃詞 第7調 】

ハリスト スか みよ 、 なんぢは じゅうじ か に て し を ほ ろ ぼ し 、 と う ぞ
 神 園 開 き 、 け い こ う ぢ ょ の か な し み を な ぐ さ
 め 、 し と に なんぢが ふ く か つ し て 、 せ か い に お お い な る あ わ れ
 使 徒 爾 復 活 つ し て 、 世 界 に お 大 憐
 み を た ま い し を つ た え さ せ た ま え り 。
 光 榮 は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

し と と ひ と し く ど う ぎ な る も の ち ゅ う じ つ に し て し ん ち な る
 使 徒 等 同 座 者 忠 實 神 智
 ハ リ ス ト ス の え き し ゃ 、 せ い な る し ん に え ら ば れ た る ふ え 、 ハ リ ス ト ス の
 役 者 聖 神 撰 笛
 あ い に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う し ょ う し ゃ 、
 愛 満 器 我 國 光 照 者
 あ し と し ゅ き ょ う せ い ニ コ ラ イ よ 、 なん ぢ の ほ く ぐ ん の た め 、
 亜 使 徒 主 教 聖 爾 羊 群 爲
 お よ び ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い さ ん しゃ に い の り
 及 全 世 界 爲 生 命 賜 聖 三 者 祈
 た ま え 。



こうえいはちとことせいしんにきす いまもいつもよよにアミン。
光 榮 父 子 聖 神 歸 今 何 時 世 世



せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわれめよ。
聖 常 生 者 の 我 等 を 憐



せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのもものよ、
聖 神 聖 勇 毅 聖 常 生 者



われらをあわれめよ。
我 等 を 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第7調 】

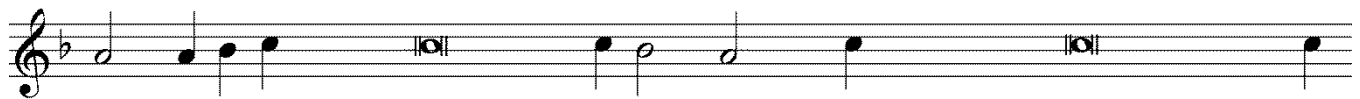
司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、



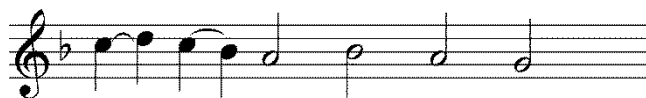
なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は其民に力を賜い、主は其民に平安の福を降さん、



しゅはそのたみにちからをたま い、しゅはそのたみにへいあんの
主 其 民 力 賜 主 其 民 平 安



ふくをくださん。
福 を 降

誦經) 神の諸子よ、主に獻ぜよ、光榮と尊貴とを主に獻ぜよ、

しゅ は その た み に ち から を た ま い 、 しゅ は その た み に へ い あ ん の
 主 其 民 力 を 賜 い 、 主 其 民 平 安 の
 ふ く を く だ さ ん 。

誦經) ^{しゅ そのたみ ちから たま} 主は其民に力を賜い、

しゅ は その た み に へ い あ ん の ふ く を く だ さ ん 。

【 使徒經 (アポストロス) 181 端 コリント後書 6 章 1~10 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ しょ よみ} 聖使徒パウエルがコリント人に達する書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい われら どうろうしゃ なんぢら もと かみ おんちよう いだづら う なか けだし} 兄弟よ、我等は同労者として爾等に求む、神の恩寵を徒に受くる勿れ。蓋

^い言えるあり、^い納るべき時に我爾に^{とき われなんぢ き}聽き、^{すくい ひ なんぢ たす}救の日に爾を助けたりと。^{み いま よ い}視よ、今は嘉く納る

^{とき み いま すくい ひ}べき時、視よ、今は救の日なり。^{われらなにごと おい つまづき ひと お わ つとめ そしり}我等何事に於ても躓を人に置かず、我が職の謗

^うを受けざらん爲なり。^{ため われらおよそ こと おい おのれ かみ えきしゃ あらわ すなわちおお にんたい}我等凡の事に於て己を神の役者と顯す、即多くの忍耐

^{かんなん きゅうぼう こんく ぼくけい きんごく そうらん きんろう けいせい きんしよく}に、患難に、窮乏に、困苦に、扑刑に、禁獄に、争亂に、勤勞に、儆醒に、禁食

^{けつじょう ちしき ごうにん じんじ せいしん いつわり あい しんじつ ことば}に、潔淨に、知識に、恒忍に、仁慈に、聖神[°]に、偽なき愛に、眞實の言に、

^{かみ ちから おい さゆう て ぎ ぶぐ もつ そんえいおよ ちじよく あくひょうおよ れいぶん}神の能に於てし、左右の手に義の武具を以てし、尊榮及び耻辱に、惡評及び令聞

^{おい あざむ もの に まこと し に し し}に於てす、欺く者に似たれども、眞なり、知られざるに似たれども、知られ、死したるに似

^{たれども、}たれども、^{み い ぼつ う に し わた うれ に}視よ、生けるなり、罰を受くるに似たれども、死に付されず、憂うるに似たれども、

^{つね よろこ まづ に おお もの と あ に あ}常に喜び、貧しきに似たれども、多くの者を富ませ、有るなきに似たれども、有らざるなし。

(比較用 口語訳) わたしたちはまた、神と共に働く者として、あなたがたに勧める。神の恵みをいたずらに受けてはならない。神はこう言われる、「わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救の日にあなたを助けた」。見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である。この務がそしりを招かな

いために、わたしたちはどんな事にも、人につまずきを与えないようにし、かえって、あらゆる場合に、神の僕として、自分を人々にあらわしている。すなわち、極度の忍苦にも、患難にも、危機にも、行き詰まりにも、むち打たれることにも、入獄にも、騒乱にも、労苦にも、徹夜にも、飢餓にも、真実と知識と寛容と、慈愛と聖霊と偽りのない愛と、真理の言葉と神の力とにより、左右に持っている義の武器により、ほめられても、そしられても、悪評を受けても、好評を博しても、神の僕として自分をあらわしている。わたしたちは、人を惑わしているようであるが、しかも真実であり、人に知られていないようであるが、認められ、死にかかっているようであるが、見よ、生きており、懲らしめられているようであるが、殺されず、悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物を持っている。

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾 に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾 の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第5調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅ われなが なんぢ じれん うた わ くち もつ よよ なんぢ しんじつ った} 主よ、我 永く 爾 の慈憐を 歌い、我が口を以て 世に 爾 の 眞 實を 傳えん、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{けだしわれい じれん なが た なんぢ なんぢ しんじつ てん かつ} 蓋 我 言、慈憐は 永く 建てられたり、 爾 は 爾 の 眞 實を 天に 固めたり、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅざい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する 主 宰よ、我が 心 に神を知る 智慧の 淨 き 光 を 輝 かし、我が 思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、 爾 が 福音の 教 を 悟らしめ 給え、我が 衷に 爾 の 福たる 誠 を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの 肉 體の 慾を 踏み、凡そ 爾 の 喜ぶ 所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を 思い且つ 行 いて、 属 神の 生活 を 過ぐるを 致させ 給え、 蓋 ハリストス 神よ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
爾は我が 靈と體との光 照なり、我等 爾と 爾の無原の父と至聖至善にし

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を 施す 爾の神とに光 榮を 獻ず、今も何時も 世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 105 端 25 章 14~30 節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいはなんぢにきす。
主 光 榮 爾 に 歸 し、 光 榮 爾 に 歸 す。

司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 主は左の譬を設けて曰えり、天國は他の地に往かんとして、其諸僕を召し、彼等に其

しゅゆう たく ひと ごと ひとり ぎんごせん ひとり にせん ひとり いっせん おのおのそのさい
所有を託したる人の如し。一人には銀五千、一人には二千、一人には一千、各其才

のう おう これ あた ただち た ゆ ごせん う もの ゆ これ もち た
能に應じて、之を與えて、直に起ち行けり。五千を受けし者は往きて、之を用いて、他に

ごせん え にせん う もの またにせん え ただいっせん う もの ゆ これ ち
五千を獲たり。二千を受けし者も亦二千を獲たり。惟一千を受けし者は往きて、之を地に

うづ そのしゅ ぎん かく ひさ のち こ しよぼく しゅかえ かれら かいけい ご
埋めて、其主の銀を蔵せり。久しくして後、此の諸僕の主歸りて、彼等と會計せり。五

せん う もの た ごせん たづさ つ いわ しゅ なんぢごせん われ たく み
千を受けし者は他に五千を攜えて、就きて曰く、主よ、爾五千を我に託せり、視よ、

われこれ もつ た ごせん え そのしゅかれ い よ かな ぜん ちゅう ぼく なんぢ
我之を以て他に五千を獲たり。其主彼に謂えり、善い哉、善にして忠なる僕よ、爾は

すくな もの おい ちゅう われなんぢ おお もの つかさど なんぢ しゅ たのしみ い に
寡き者に於て忠なり、我爾に多く者を督らしめん、爾が主の歡樂に入れ。二

せん う もの またつ い しゅ なんぢ にせん われ たく み われこれ もつ にせん
千を受けし者も亦就きて曰えり、主よ、爾は二千を我に託せり、視よ、我之を以て二千

え そのしゅかれ い よ かな ぜん ちゅう ぼく なんぢ すくな もの おい ちゅう
を獲たり。其主彼に謂えり、善い哉、善にして忠なる僕よ、爾は寡き者に於て忠

われなんぢ おお もの つかさど なんぢ しゅ たのしみ い いっせん う もの また
なり、我爾に多くの者を督らしめん、爾が主の歡樂に入れ。一千を受けし者も亦

つ い しゅ われなんぢ げんこく ひと ま ところ か ち ところ
就きて曰えり、主よ、我爾が嚴酷なる人にして、播かざりし處に穫り、散らさざりし處

あつ し ここ もつ われおそ ゆ なんぢ ぎん ち かく み なんぢ もの
に聚むるを知れり、是を以て我懼れて、往きて、爾の銀を地に蔵せり、視よ、爾の物

^{なんぢこれ たも} は 爾 之を有てり。^{しゅかれ こた い} 主 彼に答えて曰えり、^{あ おこた ぼく なんぢ わ ま} 悪しくして 情 れる僕よ、 爾 は我が播かざりし
^{ところ か ち} 處 に穫り、^{ところ あつ し} 散らさざりし 處 に聚むるを知れり、^{ゆえ わ ぎん ぼうえきしゃ たく} 故に我が銀を貿易者に託すべかりしな
^{しか われきた もとぎん り う} り、然らば我來りて、本銀と利とを受けしならん。^{ゆえ かれ いつせん と} 故に彼より一千を取りて、^{じゅうせん も} 十 千を有
^{もの あた けだし およ も} てる者に與えよ。^{もの あた あまり も} 蓋し凡そ有てる者には與えて、餘あらしめ、有たざる者よりは其有て
^{もの うば むえき ぼく そと くらやみ とう} る物も奪われん。^{かしこ なき はがみ} 無益なる僕を外の幽暗に投ぜよ。^{い おわ} 彼處には哀哭と切齒とあらん。言い畢
^{よ みみ き う もの き} りて呼べり、耳ありて聽くを得る者は聽くべし。

(比較用 口語訳) 天国は、ある人が旅に出るとき、その僕どもを呼んで、自分の財産を預けるようなものである。すなわち、それぞれの能力に応じて、ある者には五タラント、ある者には二タラント、ある者には一タラントを与えて、旅に出た。五タラントを渡された者は、すぐに行つて、それで商売をして、ほかに五タラントをもうけた。二タラントの者も同様に、ほかに二タラントをもうけた。しかし、一タラントを渡された者は、行つて地を掘り、主人の金を隠しておいた。だいぶ時がたってから、これらの僕の主人が帰つてきて、彼らと計算をしはじめた。すると五タラントを渡された者が進み出て、ほかの五タラントをさし出して言った、『ご主人様、あなたはわたしに五タラントをお預けになりましたが、ごらんとおり、ほかに五タラントをもうけました』。主人は彼に言った、『良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。二タラントの者も進み出て言った、『ご主人様、あなたはわたしに二タラントをお預けになりましたが、ごらんとおり、ほかに二タラントをもうけました』。主人は彼に言った、『良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。一タラントを渡された者も進み出て言った、『ご主人様、わたしはあなたが、まかない所から刈り、散らさない所から集める酷な人であることを承知していました。そこで恐ろしさのあまり、行つて、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。ごらんください。ここにあなたのお金がございます』。すると、主人は彼に答えて言った、『悪い怠惰な僕よ、あなたはわたしが、まかない所から刈り、散らさない所から集めることを知っているのか。それなら、わたしの金を銀行に預けておくべきであった。そうしたら、わたしは帰つてきて、利子と一緒にわたしの金を返してもらえたであらうに。さあ、そのタラントをこの者から取りあげて、十タラントを持っている者にやりなさい。おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう。この役に立たない僕を外の暗い所に追い出すがよい。彼は、そこで泣き叫んだり、齒がみをしたりするであろう』。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいはなんぢにきす。
 主、光榮は爾に歸し、光榮は爾に歸す。

※聖体礼儀3 (金口イオアン) へ